



共  
卷  
拾  
卷  
冊

稽  
德  
編

九





稽德編卷之

治十九年  
八月  
點查章

東照宮第九

慶長十九年七月廿八日榮亭より 伊賀守へ

收り来金澤文庫に傳へしと駿府へ進上るる

書籍は河内活遊より少く國々所々八十少く

外國より来りし事数多也 君臣言行録と同

一 因十月吉元越川舟橋吉舟河通り以著述

往來本を以て也 書也 乃中産板九を副書其

後より舟橋吉舟 往來書 其 爲すなり



禁裏(一)や併大勝て及少海(一)と(一)  
騎(一)海(一)と(一)の(一)任(一)と(一)と云

一 大坂陣の敗る月廿五攻口の(一)破(一)所(一)自(一)退  
北(一)れ(一)降(一)軍(一)く(一)沙(一)渡(一)遊(一)と(一) 神(一)倉(一)一(一)路  
少(一)て(一)黒(一)川(一)初(一)夜(一)渡(一)ま(一) 陣(一)定(一)了(一)い(一)う(一)と(一)釋(一)と  
城(一)中(一)巡(一)見(一)り(一) 市(一)借(一)小(一)敷(一)と(一)休(一)整(一)を(一)作  
渡(一)守(一)正(一)信(一)長(一)く(一)禁(一)割(一)に(一)中(一)を(一)虜(一)と(一) 夜(一)の(一)北  
ち(一)も(一)不(一)付(一)り(一) 艱(一)色(一)の(一)神(一)田(一)伊(一)丹(一)織(一)と(一) 麻(一)色(一)の  
馬(一)と(一) 堀(一)内(一)小(一)寺(一)と(一) 城(一)中(一)り(一) 陣(一)定(一)と(一) 雨

一 之(一)如(一)く(一)打(一)喜(一)と(一)と(一) 沙(一)藤(一)ひ(一)と(一)れ(一)を(一) 加(一)賀(一)城  
前(一)姓(一)所(一)場(一)ま(一)て(一) 沙(一)出(一)り(一) 任(一)と(一)く(一) 遠(一)陸(一)と  
一 因(一)陣(一)極(一)月(一)廿(一)日(一)に(一) 自(一)小(一)寺(一)先(一)に(一) 城(一)近(一)く(一) 陣  
替(一)任(一)り(一)と(一)と(一) 和(一)五(一)郎(一)宗(一)沙(一)使(一)番(一)と(一)て(一) 再(一)言(一)福  
少(一)は(一) 城(一)近(一)く(一) 夜(一)向(一)き(一) 事(一)小(一)寺(一)の(一) 陣(一)分(一) 夜(一)軍(一)務(一)以(一)成  
と(一)し(一)て(一) 任(一)り(一) 渡(一)守(一)正(一)信(一)長(一)に(一) 小(一)寺(一)先(一)に(一) 任(一)り(一)と(一)  
二 日(一)早(一)矣(一) 沙(一)先(一)に(一) 何(一)れ(一)に(一) 城(一)近(一)く(一) 陣(一)と(一) 石(一)倉(一)軍  
陣(一)下(一)知(一)れ(一)り(一) 何(一)れ(一)を(一) 相(一)辭(一)せ(一)り(一) 井(一)伊(一)重(一)春(一)子(一)の  
陣(一)定(一)と(一) 堀(一)内(一) 越(一)後(一)能(一)と(一) 一(一)路(一)り(一) 一(一)路(一)り(一) 要(一)圖(一)と(一) 廿





本多信俊等 十名 將軍孫少也沙也等  
如之く沙屋の人を伺ひ申上 信少執事等  
此方より敵と申對して陣中より安<sup>盛</sup>し  
如く申終末是等大人柄の経身より 上  
在り信俊等 將軍等 是山へ 上 敵少  
將軍孫 沙屋より 托されし事

一 同廿日 大坂沙和院調へ織田有樂大將修理  
所目見小室白少事り 是服之候より 信  
海守麻堂和島守孫移下也 沙和院此處是下

此等沙和院等より 此處に 信秀頼と申  
矢は彼等異國よりと 沙和院等 是等 小別  
候より 沙和院沙和院 小島名小島 上事り  
本多上所及と申て 修理中 所へ 是等 事候  
名姓 信忠より 少人 度大坂幕陣の法守小  
島成方矢と申度 武勇の度 一 是等 秀頼  
入小島人の事と 修理中 申り 小島少と申  
申之 修理中 有夜と違へ 所在 是等 所上  
所不沙和院 外 小島 修理中 是等 小島 候

上意の申して涙と流せしは 御州参府と所  
向の氣旺を御推察さし見えたり 後文  
陰謀を御推察せし能く見抜し事不  
記小の也

一 因坊八十二條御城より傳長左へ第一沙魯  
書物進上

旧事本記 古事記 續日本記 文徳實錄  
三代實錄 江家實錄 明月記 繪文粹  
菅家文集 西宮記 釋尊本記 内裏記

山姥記 勘裏三代格式

等也 此は御在御事申す所を御沙魯を男也  
是等下と有りし格を平候人等あり

一 九月廿日大坂御陣の夜菅和泉守の控候  
久具固備より本御座向入と云く 和泉守より廿六  
敷候方の間ふ下塔をめり火をさやく 和泉守  
はと下塔ゆく 取しせしつて山姥早二の  
沙羅御座よりと云く 以て本御控候候  
和泉守乃と云く 控の下塔よりと云く 塔を敷  
多し候より 和泉守 取せし控と傳し 軍の利と





一 因陣小執本志は一吸旨の秋は陸奥の  
岩澤れとと一方の朝近くと今をて七方果不  
家老平兵衛三右衛門水野大守とて子孫に  
神々今も危高後守る所の次者とて以て神  
勢を備へしとて相傳所 一言も  
の一人我を南海とてありあへずや  
相伝所より傳へて守る所とて  
敵のは急を我に許し進歩するも  
朝朝は又とてとてとてとてとて

小中月五人等とて此陣の志とて  
己志を以て我に許し進歩するも  
聖云乃朝道明言は久庵若以我子とて  
程を以て我に許し進歩するも  
御腹立候とて右の如く忠とて  
不所 如答候の志とて西宮抜けとて  
表乗御出候とて押該云とて丹波意切とて  
於て陰謀とてとてとてとてとて  
関への志とてとてとてとてとて

牛之園おて能号志の湯廣とい甲と稱して  
やの丹波兵糧多しなり最早餓死といふ事  
ある小園慶の庭へ志へ成なり死ありと  
心易して馬刈等せよと始ありふむ古に狂  
れは是小獨り夫と見えくふふふ

神君は沙羅とて皆々感々也

一 右陣の長谷信公より沙使番等をして信  
らるる城守より大軍出りし旨早に沙羅  
活に死に振少々の沙事より以の外は正色

更し城守押ておゆとと敵に七事ありてハ  
ありしと夫と大軍をい振なりと云信長も在  
將軍は使番の城守より事々發沙也里  
なるといひと云云城守等城守より先事乃  
小高頭より沙羅奉持武有入交里濃礼等  
万沙使番をい通し入ると小高頭より武有  
なりと云横田喜右衛門より通波一より下志  
少く影より武有より小高頭より先事より  
信長より通波より成物行也

一 同陣の布衣百人と見たり 経年秀  
少を揚せ給ふ沙再喜の令わ秀くは波中少  
臨り 今日女存事方沙先が史記経年れ  
方何あふふ之の聞り 唐紀年少がら也  
掃部和承子経朝と少時を常力下知して  
立事子也 柳婦子夜言の計部して之死  
難何の家人何と候と 同事方是時  
廿五及ふとせらるる人返りて軍戎  
下知して宗也 せらるる軍敵して後常力

源く悲傷の色見ゆと云

一 因陣の長秀類井俣掃部と以て候人れ  
ゆ何方少の沙女掃部少の沙段とて  
く沙かきく包くは秀吉其色は沙段  
今文痛甚思ふ最早見すは少の各段若  
少指して候きくは夜宿連は甲斐守あり  
波は朱貞直のより纏珍は織具は少洗徳常  
して門は少くは少は掃部連唐原光少對面  
少子細と問義候は少甲斐守は少四條

子十六歳少てふ一昨二藤井年少てふ存  
之殿少子願唯方より父の卜示承て城入籠り  
秀頼公は伊保傳之志也不國成公は淺代  
のり浪人少て當分く計入へもさまでは是  
途と見座者すされははてと若くは此公は  
淺代之入居りし時小細中27少くは方あり居ん  
りては浪人成れ和より今少少て教訓中は  
大助團と入居り父は伊保 昨28生年即出少  
我必討死さ下一汝は秀頼公は先朝の口供

せし中は一利きく一是是あり方仲  
是か了方教して中も動い美念の由人  
なりして度處29不立常と表事明く行さるり由  
くは只是も先朝と古侍は誠少ら矢の血  
跡ハ必是事とて候後流し候り甲斐秀頼  
此列之後秀頼公は少振り伊保公は後石  
調進中の中村道智道成は是少り世  
急劇の内中にて是れのみ才是を人其也  
とて是くは伊保公は一甲斐中文字附と

あ、天は使余をよとくと秀頼公を遠殿と面を  
さす(馬ふ石高の八のちりきと悪口一)と  
同て(四)入るる(念佛持名の群)と(因多)光元  
外よりと(沈砲)おる(秀頼)并(遠殿)也(て)男  
三十余人(六)日(午)別(生)害(たり)秀(頼)廿(二)歳(迄)  
殿(二十九)也(甲)並(支)也(裁)判(中)也(と)

神君御感立ては(は)人(階)ふ(上)重(子)と(は)  
何(り)重(後)に(原)信(正)別(伊)て(三)毫(石)所(と)後  
して(七)石(石)と(れ)考(る)廣(高)薩(赤)川(後)黒(田)因(取)取

多(月)初(又)秀(頼)生(害)山(一)尾(石)淺(岡)石(一)所(が)不  
石(と)也(板)倉(内)膳(二)騎(沙)供(城)程(沙)隱(密)赤(葉)  
臼(山)と(御)城(内)稜(跡)沙(也)り(京)務(中)重(信)  
隔(遠)に(ヶ)根(大)人(我)の(後)信(大)雨(と)と(り)之(意)  
少(い)の(上)意(を)り(去)り(て)天(年)解(達)海(中)に  
思(い)し(と)り(其)由(也)守(れ)志(す)空(く)我(と)と(り)  
平(方)より(南)方(て)大(雨)降(れ)中(に)御(守)所(に)  
石(と)つ(者)を(採)り(て)上(下)然(れ)る(後)遠(海)所(に)  
少(量)之(を)三(馬)柱(知)兩(具)と(指)上(り)夫(より)京(都)

二條城(亥)の利は是をこれ内務出立  
事大寺沙(乙)と申すはこれ御所陣の御  
所なりと申すは此中へありて侍  
同士の居交存候守堅めりなり  
○と聞せ入道なり大坂陣の流官にて御  
所と云ふは後房頼の子園松丸と云ふは  
少くは御所の後生なりと云ふ

一 園原陣の首名松原守備城小笠原  
松丸松と云ふは由緒なく候なり

一 下を御所と申すは菅城城なりと云ふは  
後方乙八月御所城なり

一 故松平鷹石未長平や未長度河内守  
なきはより御城(乙)と申すは御所  
鷹石何れは御所を見先と申すは御所の御所  
の名は是を若侍惟是見先と申すは御所の御所  
法の名にて是を御所と申すは御所  
と云ふは御所と申すは御所と申すは御所  
御所と申すは御所と申すは御所と申すは御所

そとの 上意ゆく下意これ別帳子と云ふは  
有馬海士一萬石は数倍より之此八幡布と  
ありやうとこれ思ひて長巻物と云  
せしは是も是駿河五城の所少少程小  
分派を相承し目立たる衣服等と云ふは  
の外化り遊るに少進考の内少少派の家  
まで外派進つてある者少少と云ふは  
古より彼人同門に少少進つたれば諸士各  
のまゝに軍役或具木の器等と云ふと云ふ

思ふ所寄すの事ありと也

一 大坂冬陣の節駿河に下りて 御用を以て供  
ひき申す也 東照宮御孫の松平武為守  
忠政と云ふ所侍城の大坂を 西至信濃の列  
少て兵糧運送の咽喉なり是故大坂の取也  
てハ何古古守子進様列へ帰り大軍地危ヶ  
後へ入へ城之建部三十所と古語に云ふ  
厚く力くを早くと云ふは古守御孫の  
之夜の申忠政口早を立下揚別非法執く

一天正十八年正月十三日 漸入洛十有秀秀子  
論 諸事未竟而改不謂之曰秀志勿拘我  
他酒不思ひ子復く歸心せよ 云 世に  
候く 公に即座不起 一歩せめて曰能生長  
世り 然るに 終縁衣振是 回念 振也 高年  
侍のと呼ひ公を引く 莫小入 大臆子  
之 髪を結ひ 衣及 肩衣袴を 更に 秀子  
別 衣を 施す 不力を 申す 是と 常世の  
即之を 執り 回く 初て 西改 不謂之 曰我

長丸とて 鄙拙を 改め 都振 不其 汝是と 見上  
亦 <sup>喜</sup> 在り 不 公 河 へ 見 せ ぬ 必 然 然 候 也  
是 人 亦 候 後 歸 國 せ ば 我 亦 近 江 東 宮 へ  
廿 方 馳 奔 不 還 重 經 不 神 者 百 秀 秀 子  
忍 ぶ 事 あり 不 必 我 公 内 の 誠 候 傷 候 事  
本 事 仇 爲 候 大 命 候 事 曰 秀 秀 我 誠 候 傷  
候 事 汝 亦 道 路 の 諸 誠 を 掃 除 せ ば 果 然  
公 の 言 始 ぬ 事 三 言 理 經 へ 後 秀 秀 書 信 候  
誠 候 傷 候 事 候 事 云 云



一 千代姫君御所と世の流いの舟といふ老女  
 沙伽小舟をこし世入ぬささくハ 控理御  
 流生小沙粒の流毎相九段御存之の所着初  
 なされ 或は御所御三三〇程遊ばす  
 夜半此の流小憐念くしと宮守御耳小  
 入るれと御目覚まされと誠小九命傳と初  
 憐念きくと思召水中小沙手水少て沙生  
 流をれく沙打舟入ると縁ひ沙生と  
 の方三宮御元くおとと主君と風雨を流り

こそ幸ひ小思ひ何名もらん御宿所へ思ひ  
 太力ありと考きと考沙身入て沙宿所は  
 立寄り御宿所され考きと 昨夜宿三万石  
 跡向りまよりと猶小大知沙は月夜をくれ  
 御宿所とを沙ありありと下地番所と何  
 右語とや家存を何とともやと沙記され  
 沙はり遊りてと交御宿所の内と又石豆成  
 ぬと何と何と更とよりと沙は沙遊りぬと  
 只今用所と能所と 相寄中と少と記

小の流有るは其の事を見えたりと云ふは是れ少くも  
くしく桐部へ入極の下に隠れ居るを以て  
中食議是ありと云ふ甲斐猪頼の家来中  
何とて 彦彦討ふより猪小とて了りぬ三  
年に其れとて之討ふも 今今宵風雨に  
知れお討ふとて 御寝方入其ひりぬ  
は運次く通しと云り中食中食は彦彦の家来  
中へく是れ猪頼小頼まれしとて之御家来  
より猪の仁方重頼小彦彦もいひて是れ

中上考述を 上云ふハ我三三三の名甲別へ  
紳して其の故葬出く為程の候くくんと云向  
の云ふ不忠不義是ありと云ふ御家来小彦彦と  
ては猪頼の家来中彦彦の命と云ふは猪  
の故へ方死より罰おけり猪頼は御怒情  
思ひ甲別の名の故葬出の事とておき言  
涉送せざるまき甲別へ其れくは猪を彦  
御怒思ひて御子孫と御家来ありし能開き  
後へは知者なきは御家来とて又



不承所 権現抽後 然も我も不承極の物  
 是すくは但し我も我も極大切と思ひ入るの件  
 水の申へ之を飛入り命を度取ると海をさす上  
 なる余極所持のし城士なる余を不承也  
 之より年六十余州忍しき敵に伊豆の  
 少殿城を我を至極の賄物と云ふ事秘極  
 所は伊豆御堂あり事とて大関方面より逃  
 去るより事あり 兩夜籠

御書

此云駿河小御堂権現様より  
 伊豆御堂へ  
 御成りて 選居の法を御座候御事

進言すに 此御堂は 徳川家より 不承長七二年後  
 少く 神居三十八歳 在徳三十三歳  
 大御堂に七歳 忠長君七歳 少く 伊豆御堂

一 毫十人今まのり 伊豆小御堂御成りて 道  
 少く 取度と云ふと 少く 伊豆小御堂 収  
 入るに 伊豆御堂 所の御世に 伊豆御堂の果  
 伊豆御堂 伊豆御堂 伊豆御堂  
 一 竹園御堂 伊豆御堂 伊豆御堂 伊豆御堂  
 伊豆御堂 伊豆御堂 伊豆御堂 伊豆御堂

定く申すに申すに

一 國子二種一との外公明年申す所ありて其の  
 事と方別して所秘教の唐尼振ふ言ふ事  
 夫之存あり今言能く此の生言振ふ事  
 一 知少の心利發ふ申す立本所傳ふ言ふ之を城人  
 の良宗信我信ふ言ふを言ふ八親の中事也  
 聞徳之の少く申すの中事也(聞徳振ふ事)  
 申して其信を言ふ中事八親の申すふ此の  
 後不玉部と治め申す<sup>叔</sup>の申すを立す<sup>叔</sup>の振

城り申す一辨知少の良八何事を申す城を<sup>徳</sup>  
 河原野新屋書ありてと宛初より<sup>徳</sup>の信  
 吹束少く外あり存あり種を左使すとて<sup>徳</sup>  
 是を抽束ふ言ふは初二系少く<sup>徳</sup>割の<sup>徳</sup>信  
 産を<sup>徳</sup>同く事<sup>徳</sup>取<sup>徳</sup>治<sup>徳</sup>分<sup>徳</sup>養<sup>徳</sup>育<sup>徳</sup>心<sup>徳</sup>一<sup>徳</sup>宛<sup>徳</sup>年<sup>徳</sup>三  
 年と立<sup>徳</sup>振<sup>徳</sup>言<sup>徳</sup>ふ<sup>徳</sup>城<sup>徳</sup>は<sup>徳</sup>信<sup>徳</sup>本<sup>徳</sup>深<sup>徳</sup>一<sup>徳</sup>申<sup>徳</sup>言<sup>徳</sup>  
 此振ふ振言ふ内よ悪言枝と申す<sup>徳</sup>り<sup>徳</sup>年<sup>徳</sup>と<sup>徳</sup>右  
 の<sup>徳</sup>五<sup>徳</sup>り<sup>徳</sup>申<sup>徳</sup>言<sup>徳</sup>ふ<sup>徳</sup>城<sup>徳</sup>本<sup>徳</sup>の<sup>徳</sup>後<sup>徳</sup>申<sup>徳</sup>言<sup>徳</sup>ふ<sup>徳</sup>能  
 申す城<sup>徳</sup>申<sup>徳</sup>人<sup>徳</sup>と<sup>徳</sup>申<sup>徳</sup>言<sup>徳</sup>ふ<sup>徳</sup>四<sup>徳</sup>六<sup>徳</sup>歳<sup>徳</sup>より<sup>徳</sup>八<sup>徳</sup>歳<sup>徳</sup>の

人を附せしめて悪き技の拙修不育を娘に教  
れし後、悪くもまゝに人を重んずる知少の成不育  
を之に教せんよきとん得種位お後五年はあつ  
たを悪見放して我位種位無技をうたはせり  
そなたも亦失ひし事成り申すは是れ不介  
以て五年事成りし事成り申すは是れ不介  
子孫傳へて之を以て失ひし事成り申すは是れ不介  
んが事成りし事成り申すは是れ不介  
人の事成りし事成り申すは是れ不介

他法申すも不於重親を教ふる事なれども  
以て之を以て後其親子の争ひの根も成りて  
毎度申すも関合申すは之れ親を恨む根も  
有重なり申すは之れ不介申すは之れ不介  
我亦の事なりは依依法よく仕付らるる申す  
重なり申すは之れ不介申すは之れ不介  
かりし申すは之れ不介申すは之れ不介  
前も申すは之れ不介申すは之れ不介  
お世に申すは之れ不介申すは之れ不介



能くふりくひ常しく中より在りて是れ其の  
き一の事ふん令を渡して身代なり  
外なきなり

- 一 我信中々修ふ我我の叶ひ交てふふなり
- 第一我信して親を思ふは親を見むなり
- 第二親族ふりてまじ
- 第三朋友ふりてまじ
- 第四は任ふりてまじ
- 第五我乃乃難ひふりてまじ

右五條の通儀なりて身代なりて天道を修  
治ふりて心亂し外なきなり初少  
なり相し月申ふなり事修むなり中々修む  
事なり

- 一 大石と親を授け男ありハ任信を回復す  
必は其の事なり世育は修むなり能くは修む  
事なり中々修むなり次男の威勢治すなり  
家代は其の事なり事

一 初少の夜夢なりたるなり小瀬身を授け相しなり



ゆやふんけいひのまをあらうと報して、却て下  
の怪ふまうゝあ慈悲の心を成く城の中常このたふ  
國の存存のふ成々大存の家筋家柄のふ兼  
家来とてあまそ何の代より譜代はあはれ良  
乃ち柄何れも並に存存少後ゆ子孫をそと西皮  
之と知少より家伴のちん柄如とあるゝの事  
とて留及ひるを成城の後自然と仁徳の  
神武の中大名の自方わつてなるとは事なう了  
第一陰長刀劔測と心持し入事奉りてわと

あつてなるとは事なう

一

一 學向大石を自ら惜字を成りあを及らぬゆふ

そり方とて常とて道の講釋ゆりて和物

義理を要するゆゆのふま人の行儀は

存存忠信の和物毎にせむとてまてとて

礼へ代への玉部を失ひし事とて常とてゆり

我身の曲尺ゆりまぬゆふとて掛事第一

とてゆり道の道と常ゆふとてまりてとてゆ

りゆりの後あつてはゆりてとてゆりゆりゆり

一

後と遠く外方とく事なき我心を空して  
とて<sup>い</sup>く<sup>は</sup>中<sup>に</sup>事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て  
この所にて<sup>い</sup>く<sup>は</sup>事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て  
身の内<sup>に</sup>の<sup>に</sup>善<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>人<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て  
善<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て  
善<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て  
乃<sup>に</sup>善<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て  
身<sup>の</sup>善<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て

事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て  
之<sup>を</sup>忠<sup>に</sup>信<sup>に</sup>日<sup>に</sup>進<sup>に</sup>忠<sup>に</sup>言<sup>に</sup>は<sup>る</sup>事<sup>を</sup>一  
身<sup>の</sup>内<sup>に</sup>の<sup>に</sup>善<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て  
之<sup>を</sup>善<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て  
之<sup>を</sup>善<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て  
之<sup>を</sup>善<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て

一 井<sup>の</sup>内<sup>に</sup>の<sup>に</sup>善<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て

之<sup>を</sup>善<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て  
之<sup>を</sup>善<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て  
之<sup>を</sup>善<sup>を</sup>思<sup>ふ</sup>事<sup>を</sup>我<sup>の</sup>心<sup>の</sup>所<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>後<sup>に</sup>て





元道下叶六身好我信極はぬ信忠限の程小  
叶小元祥よりの一節に城を失らぬ信忠人知  
るといふ我武極はぬ信忠も亦身離るる  
信忠を用ふ事亦極はぬ我武信忠も亦身離る  
貴別といふ事極はぬ信忠も亦身離る  
たを別ては信忠も亦身離る  
久りといふ事極はぬ信忠も亦身離る  
人の事と先づいふ事極はぬ信忠も亦身離る  
信忠も亦身離る

慢して人をあひかりあはせし事成せば信忠  
乃信忠より君父つゝをよりしめ候初也  
表裡信忠となすは信忠の信忠なり古信忠なり  
我お好とせば信忠も亦身離るる事成すは信忠  
目の信忠も亦身離るる事成すは信忠なり古信忠なり  
れよりいふ事極はぬ信忠も亦身離る  
乃信忠の信忠も亦身離るる事成すは信忠なり  
遂に信忠の信忠も亦身離るる事成すは信忠なり  
古信忠の信忠も亦身離るる事成すは信忠なり



織田氏と連年の存れりて人として仕ひた城  
初勇もよくまゝ人少てはとも 慥忠古八少  
破れし所を秀々率も起りし大岡御小坂の  
本居部勇主にて慥忠治りしや加増後十  
十年の内小天下乃主もなれし程の子  
りともあり大岡御分限の存忠破れし本  
不と上紀業せしはとも 夫も此の程と知  
是事の記秘原さきの知行主亦小記は八  
就してはやく奮と中との少くは知行主亦記

亦とさふ小町了りとさくは

一 奮んせり 拙いと 候物と 困ひ 常小 之程と  
知れしを 政道と 了りて さいり 亦さ 是も 是も  
知行主 介経りり とも 之程 亦記し 即ち 是と 八  
倉と 原川 處て 各篇の 取沙 江 浅く 由 有り  
候 若 候 主 乃 とも 後り 拙 あり 記 業 乃 以 以  
せし 由 之 候し 之 候 物 之 困ひ 事 事 事  
一 想して 石 江 者 乃 何と 仕 候 乃 酒 江 少 て 此 乃  
事 事 事 者 の 一 一 洋 人 深し 向 後 政 事 乃 概 小





此輩要聞者といふやりの利益の者も主人  
の目よりハ以て律儀を以てして其の者  
の者らに事あるは其の如き律儀の如き  
主人より以て律儀を以て其の如き律儀  
の如き律儀の如き律儀の如き律儀  
者科小中其の如き律儀の如き律儀

一 主人の風流の例は其の如き律儀の如き律儀  
の如き律儀の如き律儀の如き律儀  
有るは其の如き律儀の如き律儀の如き律儀

一 主人一人して一家中の風流受て其の如き律儀  
の如き律儀

一 此輩も其の如き律儀の如き律儀の如き律儀  
の如き律儀の如き律儀の如き律儀  
の如き律儀の如き律儀の如き律儀  
の如き律儀の如き律儀の如き律儀

一 近年の深を云ふ通の唱へ中輩老人の入ぬ  
に後えは通教序しは根も弱く中少は歳は  
遍教識（本）と樂ふなりまはせしはとも知少  
なり我國も生立多々の人を教へてせえ  
罪なりほくも知りし事皆は是且年暮り  
一りも隙もあらずゆゑはる事ゆゑは  
辭の端とてこまりやれはその業を過度  
にても又もいふの事凡念佛とてこの習はる  
の勢りわづらひ毎に羽起す 根もあへ

体と申す急ぐ如くふに考り奉る事又凡念の  
ありともよく使せし事併のうけし存（本）なり  
はては是を人の行儀とて思ふ年々の起  
り刻限と食のりり同一年の又もふ  
少て行儀のさむい思れしは由根ふのさ  
来ふも思ふ事又さしはあやも事ふし常  
に思ふてさしはあやも事一の事ふては  
只ねふ大やふも度事ふては五住の  
かへり事と根て事なり

右に就くく申すに只此小女母身の中  
袴我作は女に申すに只此小女母身の中  
右の文々西へ置候に並候人の後にも  
書候に候はし

二月廿号

近く申すに只此小女母身の中  
近く申すに只此小女母身の中

替徳編卷三九終

